

# 「アントニイとクレオパトラ」試論

## ——愛の最高精神——

横 森 正 彦

### 〔I〕

諸家が述べているように、「アントニイとクレオパトラ」は「オセロ」や「ロミオとジュリオエット」と同様、愛の悲劇の世界をちがったタイプに扱っている。アントニイとオセロは中年男として、ロミオは美しい青年として登場してきている。ロミオは純粋に悩み、清らかなにも悲劇的に終わるのに対して、オセロは、ロマンチックな人物<sup>1)</sup>と、栄光に対するノスタルジアを感じている<sup>2)</sup>とかいろいろ見方はあるが、黒人ムーア人の高潔さと高邁さを持ち合わせた悲劇の人物として終り、アントニイは愛欲につかっていることをわきまえながら、それからのがれることはできないで、最後は帝国を投げ出してしまふわけである。この劇は、「ハムレット」(1600—1)、「オセロ」(1604—5)、「リア王」と「マクベス」(1605—6)と創作の時代が諸家によって推定されている。これらの作品の次に書かれた「アントニイとクレオパトラ」が1606—7とされている。

There is none but he  
Whose being I do fear : and under him  
My Genius is rebuked, as it is said  
Mark Antony's was by Cæsar.

(Macbeth, V. III.)

シェイクスピアは、「アントニイとクレオパトラ」を書く前に「マクベス」を書いていた時、プルタークのことを彼はこの時すでによく知っていたという仮説はこの箇所が引き合いにだされる。

「アントニイとクレオパトラ」劇を考察する時、「ジュリアス・シーザー」の暗殺のことを忘れるわけにはいかない。その劇は1599—1600と推定され、正義と自由と理想的政治思想を説くブルータスに対してアントニイがシーザーを弁護し、ブルータス一派を滅亡させる主要人物として登場する。彼らを倒して、彼は、オクタヴィアス・シーザーとレピダスとともに三頭政治を組織するのである。シェイクスピアの「アントニイとクレオパトラ」はその後のアントニイの愛欲の絆から逃れられない運命を描いている。また、コリオレイナス (1607—8) (推定) の存

在を忘れてはならない。この作品は、ローマの將軍コリオレイナスが高慢さ故に、ローマを追放され、ヴォルサイ人（ローマの敵）と組んでローマを攻めるためにすぐ近くまでくるが、自分の母の言葉に従い兵を引いた。

「おまえの伝記には、こんな言葉が書かれる（この男は立派だったが、晩年は恥知らずのことをして、祖国ローマを攻めたが故、後の世まではすべき名を刻んだ）」と

（5幕3場）

彼は、そのために、ヴォルサイ人から裏切り者扱いされ、陰謀者の一部に殺された。しかし敵の町でさえ偉大なる者として扱われた。この「コリオレイナス」「アントニイとクレオパトラ」「ジュリアス・シーザー」いずれもプルタークのものを原本にして描いており三篇ともローマ人を主人公にしているが、シェイクスピアは、このローマ人の奥底にはエリザベス朝人の影の存在を、さらには、もっと広い意味で現代に生きる我々に、たとえば、「コリオレイナス」のなかにある「お前がローマに勝てば、それによって手にはいるものは、呪われる悪名なのだ」と、（ローマを追放されたがローマを攻めなかった）のは母の説得もあったためであるが]相手が悪いからといって窮地に追いこんではならない。人間の精神は使い方によってどのようにもなることをシェイクスピアは教示している。現代に生きているいわゆる知識階級の人間の陰謀の愚行を象徴的に示唆しているのである。諸家が記述していることだが、「アントニイとクレオパトラ」はシェイクスピアの First Folio (1623) が原本で、最初に「第一幕第一場」とラテン語で記録されているが、あとはその区分の表示がみられない。現代のように五幕構成になっているのは、18世紀の編者たちの手によるものであるが、本来は「場」を単位にするのが忠実である。<sup>9)</sup> また、「歴史劇」historical play というのは、1623年版のなかで、Comedies, Histories, Tragedies,\* と分類されている。<sup>10)</sup> 上記の作品は、そのところからきている。Shakespeare Et Le Théâtre Élizabéthain のなかにもみられるが、プルタークはモラリストとして、たとえば、Samson Agonistes の作者 John Milton (1608—74) はサムソンとデリラを自由な人間として考えることができなかった。要するに、道徳的にものごとを観ることが強い。また、ミルトンはサムソンに政治的な自己投影をしている。彼の政治意識をレンズとして用いている。このことはアントニイの政治行動の挫折感によくにているところである。しかしシェイクスピアはクレオパトラを観る時、道徳を全く無視するわけではなく、彼女を通じて、芸術的歓喜を感じていたのである。<sup>11)</sup> シェイクスピアの立場を別にし、主人公の行動を認めている。

## 〔II〕

「プルタークの英雄伝」からとられたアントニイは、「まず、シーザーがポンピーを倒し、ブルータスがシーザーを倒し、アントニイがブルータス一派を滅亡させた。そして、三人の男

が世界を分割支配の型をとった。それは、アントニイ、オクタヴィアス、そしてレピダスである。この三人に対して、ポンピーの息子セクスタス・ポンピーが反乱を起こした。アントニイはポンピー殺害を補佐官に命じ、小シーザーはレピダスを牢に入れた。のこるのは両雄二人である、という関係で登場してくる。

Then, would, thou has a pair of chaps, no more;  
And throw between them all the food thou hast,  
They'll grind the one the other. Where's Antony?

(III. V. 14—6)

アントニイかオクタヴィアスのどちらかが死なねばならないことになる。プルタークの世界は平板であるが、シェイクスピアの世界は悲劇的で、善か悪、賢か愚か、はっきり区別され、アントニイは恋愛に耽溺し、オクタヴィアスは思慮が深い人物として、それぞれ立体的関係のなかで登場しているのである。

O Antony!

I have follow'd thee to this; but we do lance  
Diseases in our bodies: I must perforce  
Have shown to thee such a declining day,  
Or look on thine; we could not stall together  
In the whole world: but yet let me lament,  
With tears as sovereign as the blood of hearts  
That thou, my brother, my competitor  
In top of all design, my mate in empire,  
Friend and companion in the front of war,  
The arm of mine own body, and the heart  
Where mine his thoughts did kindle,—that our  
stars,  
Unreconcilable, should divide  
Our equalness to this. Hear me, good friends,—  
But I will tell you at some meeter season:

(V. I. 53—67)

この世界（現代にも通じる）に両雄並び立たずである。権力の理想と現実には大きなひらきのあることを象徴している言葉である。三者のうちで、レピダスが実力では三番でありオクタヴィアスのために没するである。オクタヴィアスとアントニイ両雄がのこるわけである。オクタヴィアスは、ジュリアス・シーザーの血縁である。ジュリアス・シーザーとクレオパトラとの間にはシーザリオンという息子がある。オクタヴィアスにとって、アントニイの力や、「わし

は北極星のように不動だ」というジュリアス・シーザーの血統を引いたシーザリオンの存在は恐怖そのものである。「天界の絶対的不動の星はひとつ、すなわち、北極星なのである。」要するに、両雄並立は許されない運命なのである。他の例として、たとえば、ヘクターとアキリーズのように。<sup>4)</sup>これらのことは(私見も含まれているが)、すでにいろいろな分野で記述され、語られていることである。ひとつの星を独裁という型にしてみると、[シーザー、クロムウェル、ナポレオン、というような人物が古典的な権力の権化というタイプで昔登場してきた。また、このような独裁者は権力闘争によって絶対的支配を獲得する。この時代の権力者は(現代も同様だが)大衆をととても意識している。この「大衆」は近代社会でいう「プロレタリア」ではなく、要するに、大衆なのである。<sup>5)</sup>一方、[古代資本主義の伸張をも認めざるをえない。戦争による戦費調達や金利をめぐる金融業者の存在は、保守勢である貴族には恐れられている。<sup>6)</sup>政治的で経済的な流れをもっている「アントニイとクレオパトラ」劇は、特に、政治的な意味が大きい。指導者たちが大衆を意識してのべる「ジュリアス・シーザー」のなかの、ブルータスの言葉は、

「……この群集の中にシーザーの真の親友がおられるなら、私はその人に向って言います。ブルータスのシーザーに対する愛情もその人に劣らなかった、と。では、なぜシーザーに敵対したかと問われるなら、私はこう答える、それはシーザーを愛する心が浅かったためではない、ローマを愛する心がそれよりも一層深かったからだ、と。諸君は、シーザーが死んだためにみんなが自由の民となるよりも、シーザーが生きているためにみんなが奴隷となって死ぬことの方を望みますか。……シーザーは私を愛してくれたから、私は彼のために泣きます。彼が幸運であったから私はそれを喜びます。彼が勇敢であったから私は彼を尊敬します。しかし彼は野心をいだいたから、私は彼を殺しました。彼の愛に対しては涙をそそぎ、彼の幸運に対しては喜び、彼の勇気に対しては敬意をはらい、彼の野心に対しては死をもって報いたのです」

(本多顕彰 訳)

一方、アントニイのそれは、「アントニイとクレオパトラ」に登場してくるそれとは完全に違っている。そのことは後述として、今ブルータスに対抗して、あざやかな逆手の型をとる。

「もしも諸君に涙があるなら、今こそそれをお流しなさい。諸君は、みな、この外套を御存じでしょう。私はシーザーが始めてこれを着たときのことをおぼえている。それ

はある夏の夕方、陣中においてであり、その日には彼はナーヴィアイ族に圧勝したのであった。ごらんなさい、このところをキャシアスの短剣が突き刺したのです。ごらんなさい、悪意に満ちたカスカがどんなひどい切傷をつけたかを。このところをシーザーに深く愛されていブルータスが刺し通したのです。彼がその呪われた剣を抜き取ると、シーザーの血は、ブルータスがどんなに残酷に切りつけたかを確めるため、戸口からでも飛び出すように、剣のあとを追うたのですぞ。なぜなら、ブルータスはシーザーの守り神であったからです。おお神々は、シーザーがいかに深く彼を愛していたかを御判断下さい。これはすべての切傷のうち最も残忍非道の切傷だ。なぜなら、高潔なシーザーは彼が刺すのを見ると、陰謀者の腕よりも恐ろしい忘恩にすっかり打ちのめされ、彼の雄々しかった勇気を打ちくだかれた。そして大シーザーは外套で顔を被うて仆れたのです」

(本多顕彰 訳)

理想的政治思想の確立に悩んでいるブルータスのことを知らないわけではないがアントニイは策略の人であって理解しないふりをよそおったのである。これらの言葉（表現）くらい人間の感情の動きを鮮明にしているものはない。また、言葉を巧みに表現して人間を動かす政治家を示唆しているものである。群衆心理を利用したものである。〔H・キャントリル「社会運動の心理学」のなかにナチスに関連した研究がある。そこで服従本能へのアピール知的レベルの低い大衆に語りかける。そこで指導者は一度大衆のレベルまで降りる。〕<sup>4)</sup> ブルータスの演説と策士アントニイのそれとを比較するとアントニイのそれは全く大衆の心に同化(扇動のテクニック)した。大衆を意識しているという面で、クレオパトラも、ローマの見せものになることを恐れたし、アントニイも民衆の前にぶざまな姿をみせたくないであった場面がある。大衆を意識しているからこそ「ぶざまな姿」はみせたくないなのであって英雄的な誇れる姿ならば、逆に、大衆にみてもらいたい欲求がある。

### [III]

「アントニイとクレオパトラ」の舞台はローマからアテネ、アテネからエジプトまでの帝国のなかに演じられている大恋愛である。

I am fire and air ; my other elements

I give to baser life.

(V. II. 292—293)

この言葉はクレオパトラのもので、この表現でもわかるように、アントニイとクレオパトラの表現は、中世的で、トレミー的宇宙観である。その世界に登場するアントニイは帝国をすてて恋をとる型であられる。これはシェイクスピアの独創であって、プルタークではただ恋をする人ということだけである。それが、シェイクスピアのそれでは、不滅の愛によって詩化された世界の中で、政治的な野心が壮大な型でおこなわれているのである。しかし、先行しているのは、人間の激情から人間が人間であろうとする苦悩と人間の真実の精神への混沌と挫折のなかから生じてきた不滅の愛（有限の世界から限りなく永遠の世界への意識）の存在である。

アントニイがローマでオクタヴィアと結婚したという知らせを耳にしたクレオパトラは、その相手を知りたいという欲望が――

I am paid for't now.

Lead me from hence;

I faint: O lras, Charmian! 'tis no matter.

Go to the fellow, good Alexas; bid him

Report the feature of Octavia, her years,

Her inclination, let him not leave out

The color of her hair: bring me word quickly.

[Exit Alexas.

Let him for ever go:—let him hot—Charmian,

Though he be painted one way like a Gorgon,

The other way's a Mars. Bid you Alexas

[To Mardian.

Bring me word how tall she is, Pity me, Charmian,

But do not speak to me. Lead me to my chamber.

[Exeunt.

(II. V. 108—119)

彼女は、日常どこにもいる女性の感情を持っている。たとえ、「ナイルの女神」といわれようとも人間らしく生きた人間として表現している。彼女にとって、敵（恋がたき）の政略結婚である理由としてオクタヴィアの弟のオクタヴィアス・シーザーはアントニイに向って

You take from me a great part of myself;

Use me well in't. Sister, prove such a wife

As my thoughts make thee, and as my farthest

band

Shall pass on thy approof. Most noble Antony,  
 Let not the piece of virtue, which is set  
 Betwixt us as the cement of our love,  
 To keep it builded, be the ram to batter  
 The fortress of it; for better might we  
 Have loved without this mean, if on both parts  
 This be not cherish'd.

(III. II. 24—33)

シーザーが述べているように、政略結婚であって<sup>6)</sup>、だれもが真実のものであるとは信じていない。プルタークによれば、アントニイはオクタヴィアを愛し、三人の子供があることを述べているが、シェイクスピアは彼女との間を政略結婚と創作し、クレオパトラの愛に中心をおいた。オクタヴィアとの間にできた子供のことにはふれず、クレオパトラとの間にできた「私生児たち」のことにふれていることからその証しとなる。また、戦いを中途にして、アントニイがエジプトに行くことから明らかである。

「今度の結婚は、平和のためであって、自分の楽しみは東方にある」という意味のアントニイの表現からも明確なことなのである。一方、クレオパトラの生きた人間らしさの描写からますます女としての情念は激しいものである。

Cleo. Didst thou behold Octavia?

Mess. Ay, dread queen.

Cleo. Where?

Mess. Madam, in Rome;

I look'd her in the face, and saw her led  
 Between her brother and Mark Antony.

Cleo. Is she as tall as me?

Mess. She is not, madam.

Cleo. Didst hear her speak? is shrilltongued or  
 low?

Mess. Madam, I heard her speak; she is lowvoiced.

Cleo. That's not so good: he cannot like her long.

Char. Like her! O Isis! 'tis impossible.

Cleo. I think so, Charmian: dull of tongue,  
 and dwarfish!

What majesty is in her gait? Remember,  
 If e'er thou look'dst on majesty.

She creeps :

She shows a body rather than a life,

A statue than a breather.

オクタヴィアの存在が、クレオパトラにとって、気がかりでならない。しかし、アントニイからエジプトの永久占有権を与えられる程愛されているのである。また、部下から「女に接吻している間に、王国と領土をとられてしまった」といわれる程、クレオパトラへの愛は深いものである。それは、帝国をすててしまう程の大きなものである。オクタヴィアへの愛よりも最も高い意味の崇高な愛で自己を完全に充足している。

Ant. There's beggary in the love that can be  
reckon'd.

Ant. Then must thou needs find out new heaven,  
new earth.

新しい天、新しい地とは、全宇宙論的な意味での地上の世界の広さ空間を、愛の不滅性や巨大な情念の世界との対比のなかで表現している。彼にとって、愛は

Is to do thus; when such a mutual pair

We stand up peerless.

王国やこの大地にまさるともおとらないものである。この愛の詩は、互いの微妙な感情を深くも崇高さと必然性とを共存させている。また、愛の燃焼によって、その人間のエゴイズムの極致が浮き彫りにされてくる。そこには感情の誇張があり世界は消えていき、互いに限りなく奪いあうエゴイズムが存在するのみである。(ダヌンチオの「死の勝利」では、陶酔の絶頂において、海に向かって飛ぶ。またプラトンは「男女はもともとは一体で、ところが二つに分けられた



ためにもと一体であった男女が互いに求め合う」という論理がある。)「アントニイとクレオパトラ」との恋には純粹なものではなく泥々した愛への執着が生々しくただよっている。

Cleo. Give me my robe, put on my crown; I have  
Immortal longings in me: now no more  
The juice of Egypt's grape shall moist this lip:  
Yare, yare, good Iras; quick. Methinks I hear  
Antony call; I see him rouse himself  
To praise my noble act; I hear him mock  
The luck of Cæsar, which the gods give men  
To excuse their after wrath: husband, I come:  
Now to that name my courage prove my title!  
I am fire and air; my other elements  
I give to baser life.

(V. II. 283—294)

彼女にとって不死の魂, new heaven, new earth の世界にはいっていく。感覚的かつ肉体的なものから精神的かつ超越的な世界への移行を意味するものなのである。

#### [IV]

ルネサンスのプラトニズムと宮廷愛の伝統が結合した運命に支配されている「ロミオとジュリエット」は肉体のもつ激しいまでの熱情そのものであるが、「アントニイとクレオパトラ」は政治家としての生命とローマの運命とをエジプトの女王との情欲のなかに溶けこませてしまったが、それが、愚行であっても、人間的な真実の姿として描かれていればよいのであるとシェイクスピアは考えているようである。その言葉が抒情的な響きと詩的な香気をかもしたしているクレオパトラの台詞は

Eternity was in our lips and eyes,  
Bliss in our brows' bent; none our parts so poor  
But was a race of heaven: they are so still,  
Or thou, the greatest soldier of the world,  
Art turn'd the greatest liar.

(I. III. 35—38)

Eternity, Bliss, A race of heaven のもつ言葉の意味である

「永遠」, 「至福」, 「天上の香り」は常識的な次元のものではなく, root であり, tasted of heaven; flavour まで高揚した伏線の意味をもっている。それらは、日常的な言葉である次の

台詞といった

I prithee, turn aside and weep for her ;

(I. 111. 77)

のようではなく、単なる melodramatic なものでなく、祝福の花、すなわち, the greatest soldier of the world (I. 111. 38) の勝利の象徴, laurel victory (I. 111. 100) である。それらは, floating world から immortal な世界へいく伏線をしいたものである。中世的, トレミー宇宙観をただよわせている。たとえば, 顔は the heavens, そこに a sun and moon が宿って, 軌道をまわりながら地球を照らし, 両脚は the ocean をまたいでいて, 上げた腕は世界の冠となっていた。また, 声は天体の音楽のように美しい調和と。まさに, 大宇宙と融合しているアントニイは次のように語っている。

Eros! —I come, my queen: —Eros! —Stay for me:

Where souls do couch on flowers, we'll hand in hand.

And with our sprightly port make the ghosts gaze:

Dido and her Æneas shall want troops,

And all the haunt be ours. Come, Eros, Eros!

(IV. XIV. 49—54)

超越的な精神をもつ彼の愛する女への（クレオパトラの死は虚報であることを知らない）世界観は諦観の延長線上にある。

Unarm, Eros; the long day's task is done,

And we must sleep. [To mar.] That thou depart'st

hence safe,

Does pay thy labour richly; go.

(IV. XIV. 35—37)

妻の死の知らせをうけたマクベスの無常観と同じように, アントニイの内面にあるものは審美的なものか官能的なものというよりもいわゆる, 「この光輝やく真珠」 (I. V. 41) と融け合った symbolized した光の姿そのものである。アントニイにとって, 地上的な宝物である「真珠」は, すなわち, クレオパトラである。

そのクレオパトラは

Give me my robe, put on my crown; I have

Immortal longings in me: now no more

The juice of Egypt's grape shall moist this lip:

Yare, yare, good Iras; quick. Methinks I hear

Antony call; I see him rouse himself

To praise my noble act; I hear him mock

The luck of Cæsar, which the gods give men  
 To excuse their after wrath: husband, I come:  
 Now to that name my courage prove my title!  
 I am fire and air; my other elements  
 I give to baser life. So; have you done?  
 Come then, and take the last warmth of my lips.  
 Farewell, kind Charmian; lras, long farewell.

(V. II. 283—295)

象徴的ともいうべき、(the crown on the earth=Antony) である Crown (天上の幸福、至上の光栄のイメージ) にちりばめられた (this orient pearl=Cleopatra) Pearl (貴重なもの、精華のイメージ) はひとつの光 (人間の霊性) となり、クレオパトラの肉体の別の姿として輝いているのである。四幕で他界したアントニイすなわち Crown に五幕で他界していくクレオパトラすなわち Pearl が Crown で至上の光栄として輝きつづけているのである。しかし、これはもう肉体的なことではなく「光」という象徴的なものなのである。また、それは fire と air と water と earth という宇宙観を示す象徴であり世界の要素となっているその世界に輝き続けている。いわゆる Double Ending が一つになったのである。Double Ending したのは作者シェイクスピアの巧みな演出であって、それは深い演劇意識である。将来の芝居の可能性を追求しながら「光」すなわち愛の精神を示した。

She shall be buried by her Antony:

(V. II. 361)

The crown on the earth doth melt.

(IV. XV. 63)

地上の王冠であるアントニイが溶けてしまい死の王冠をかぶるクレオパトラとがシーザーのいう

O, noble weakness!

(V. II. 347)

地上的高貴な最後であった。like sleep のような世界、地上的要素をすて、静寂のなかに消えていく。すべてが消滅してゆき、彼等の内的、人間の霊性の象徴ともいうべき this orient “pearl” がリアリティとしての光の姿を我々にただみせているのみである。王冠に真珠の光が輝いているのみである。地上的宝物であり、ボッティチェリの名画「ヴィーナスの誕生」のごとき、クレオパトラは、ナイル川の蛇にもなった。また、ヴィーナスの絵姿でさえ遠くおよばなかった。あるいは、彼女に対して聖職にある僧侶たちさえ祝福した。しかし、それらはあくまでも地上的なものであって、ただの女性を壮大な精神の器まで導き、アントニイとの関係を結晶化した天上的段階までひきあげた作者シェイクスピアの創造性ははかりしれないものがある。

先にのべたミルトンとの比較、プルタークとのそれに比べて道徳性倫理性を無視しているわけではない。また、その自由な判断力はまれにみるものがある。我々の眼にうつるものは、情欲の美しさとか彼らの愚かな行動とか、内面的な弱さといったような人間的な行為ではなくて、恋愛の基底に流れる壮大な精神が表面に表われ、大自然との同化したなかに結晶となった真珠の光がまぶしいくらいにただひかっているものなのである。道徳的倫理的思考からは距離あるものとしても、人間の真実の光を、愛の光を無視してはならない。人間万民のなかに光っている光である。この世界は、ただ、人間の真実の姿を象徴している光のみであり、他に何にもものない愛の光である。それは、貴い輝きを放っているのであって、Crown という至上の「光栄」が、pearl という「貴重なもの」と結び「光」という天上の幸福を象徴化している精神性そのものの輝きである。

#### 註

\* 四大悲劇は a defiance of natural order という観点から悲劇論を展開することが可能である。それにひきかえ、「アントニイとクレオパトラ」は、それらの劇より人間的でなおかつ、自分をなによりも大切にすることから生じた悲劇の世界である。前述の natural order というものは、「アントニイとクレオパトラ」劇にも関連することであるが、西洋の古代中世を通じて発展した自然観における中心的な概念で、それによれば、神の被造物たる自然（天地人文一切を含む万物）には神意にもとづく普遍的な法（自然法）が浸透しており、したがって自然は秩序の一大体系をなすものとされた。この自然法的秩序は、支配と服従の関係を主軸としているもので、その原理が人間の社会に働いて、君臣、親子、兄弟、夫婦の間をはじめ、一切の人倫を定めているとされ、そこに定められた自然法的秩序に反する行為は自然の秩序の破壊をくだてる行為であり、人間の不幸と禍いの原因を作る「悪」であるばかりでなく、究極的には神への反逆行為として神の呪詛を受けるものとされた。

James Kirkup's Tales from Shakespeare, 富原芳彰編注

Antony And Cleopatra p. 66 Asahi Press.

\*\* 本文で述べたミルトンの作品は聖書をテーマにしてほとんど書いている。ここで、シェイクスピアとの比較の意味で、道徳観という点から、サムソンとデリラの物語を引用してみることによってその強さが、「アントニイとクレオパトラ」のそれと余りにも異なりすぎることがよくわかる。しかし、宗教、道徳で考えるなら別であるが、文学の存在価値として考察する場合であれば、道徳性というものはあまり大きな問題であるわけではなく、文学性という意味の高揚した感情の最も長い持続経験のなかにその価値が存在するのである。そのようなことから言えば「アントニイとクレオパトラ」の存在は大きい意味があり、本文に述べたそれと以下に聖書を引用し比較する。このような意味からも「土師記」16章4節から20節まで引用し、道徳性、文学性を管見する。

4. And it came to pass afterword, that he loved a woman in the valley of Sorek, whose name was Delilah.
5. And the lords of the philistines came up unto her, and said unto her, Entice him, and see wherein his great strength lieth, and by what means we may prevail against him, that we may bind him to afflict him: and we will give thee every one of us eleven hundred pieces of silver.
6. And Delilah said to Samson, Tell me, I pray thee, wherein thy

great strength lieth, and wherewith thou mightest be bound to afflict thee.

7. And Samson said unto her, if they bind me with seven green withs that were never dried, then shall I be weak, and be as another man.
8. Then the lords of the Philistines brought up to her seven green withs that which had not been dried, and she bound him with them.
9. Now there were men lying in wait, abiding with her in the chamber. And she said unto him, The Philistines be upon thee, Samson. And he brake the withs, as a thread of tow is broken when it toucheth the fire, So his strength was not known.
10. And Delilah said unto Samson, Behold, thou hast mocked me and told me lies: now tell me, I pray thee, wherewith thou mightest be bound.
11. And he said unto her, if they bind me fast with new ropes that never were occupied, then shall I be weak, and be as another man.
12. Delilah therefore took new ropes, and bound him therewith, and said unto him, The Philistines be upon thee, Samson, And abiding in the chamber. And he brake them from off his arms like a thread.
13. And Delilah said unto Samson, Hitherto thou hast mocked me, and told me lies: tell me wherewith thou mightest be bound. And he said unto her, If thou weavest the seven locks of my head with the web.
14. And she fastened it with the pin, and said unto him, The Philistines be upon thee, Samson. And he awaked out of his sleep, and went away with the pin of the beam, and with the web.
15. And she said unto him, How canst thou say, I love thee, when thine heart is not with me? thou hast mocked me these three times, and hast not told me wherein thy great strength lieth,
16. And it came to pass, when she pressed him daily with her words, and urged him, so that his soul was vexed unto death;
17. That he told her all his heart, and said unto her, There hath not come a razor upon mine head; for I have been a Nazarite unto God from my mother's womb: If I be shaven, then my strength will go from me, and I shall become weak, and be like any other man.
18. And when Delilah saw that he had told her all his heart, she sent and called for the lords of the Philistines, saying, Co-

me up this once, for he hath shewed me all his heart. Then the lords of the Philistines came up unto her, and brought money in their hand.

19. And she made him sleep upon her knees; and she called for a man, and she caused him to shave off the seven locks of his head; and she began to afflict him, and his strength went from him.

20. And she said, The Philistines be upon thee, Samson. And he awoke out of his sleep, and said, I will go out as at other times before, and shake myself. And he wist not that the Lord was departed from him.

(Judges, 4—20)

その昔ソレク谷に居を占めていたデリラは、彼女について読むすべての人の心にはげしい嫌悪の情を催させる。

サムソンは神の戦士であった。イスラエルの救済者としての彼の登場は今なお一つの神秘である。彼は神の計画を達成するために、よにもふしぎな方法で神に選ばれ備えられた。しかし、この勇敢な英雄サムソンに一つの根本的な罪があった。女性の魅力は彼にとって抗しがたい力を持っていた。この彼の内に根ざす弱みにつけこんで、先ず一人の、さらに別な女性が彼をいざなってついに征服してしまう。このいきさつが聖書のこの箇所記されているわけで、なかんづく、こういった手管に一番成功したのが、ここにくるデリラだったのである。

ガザにおいてすらサムソンは、すんでのところまで己が肉欲の犠牲となる場所であった。彼はこの地でも遊女の家を訪い、ペリシテ人の術策に陥っている。しかし、神は依然として彼を憐れみたまうて、町の門をかんぬきごとく引き抜く力を彼に与えて下さった。こうして、彼はペリシテ人が目を覚す前に逃れることができた。けれどもサムソンの性欲は彼をほしきままに支配し、この弱点は如何とも抑えがたいものであった。

デリラは冷やかな心を内に懐きつつ恋をよそおう技術に長けていた。愛情こまやかな親しげな様子を示しながら、サムソンを破滅の淵に導いたのである。彼女の目的は唯一つ金銭を手に入れることであった。サムソンを欺して自分たちの手に渡してくれるなら、金はたくさんやろうとペリシテ人は約束した。そこで彼女を陥れるために、どんな裏切行為も避けまいと決したのであった。

下劣な偽りの恋愛劇が展開された。私はあなたを心から愛しています。こう彼女は言った。でも、もちろん、それだけではだめです。あなたも私を愛して下さいなければ、それもあなたの全身で愛して下さいなくては。そうでなくては どうして真の愛の関係が成り立つでしょう。(このことは、クレオパトラが欲望に対して無抵抗であるとは異質のものをデリラはもっている。デリラのこうした言葉はサムソンにとって、恋愛に関して、理想的なまでに美しい考えだと理解してしまったのである。クレオパトラのアントニーに対しての愛は、肉体的意識を貪欲なまでに相手に認識させることから己れの精神的意識が無害な存在にあることまで高められたプラトンの意識の流れであって、デリラのそれは平板的であって、立体的なものではないと私は解釈する。)

デリラは破廉恥な女性として聖書中きわめて顕著な位置を占めている。彼女の罪深い生活はもとより恐ろしいものであった。しかし、金銭に目がくらんで愛をもてあそんだのはさらに恐ろしいことである。彼女は殊勝らしくサムソンに追従し、愛というものは、心のこもらない顧慮を受けるには、あまりにも高潔な神聖なものであると考えているかのようにふるまった。そして、その間自分の部屋に敵方の人々を忍ばせて、愛人をその手に渡す機会を窺っていたのであった。しかし、利己的な目的のために愛をいつわり、虚栄心と媚態にふける女性は、本質的にみなデリラに似通っている。女性的魅力と愛情の表現もまた神の

賜物であり、女性はそれをその創造主から受けたのである。従って、故意に、これをもてあそび、この最も美しい、最も高価な賜物を悪用する人を神は必ずや罰したのである。(自己の政治的な行動は天の神のまえでは正しかったという信念が、サムソンの心理のなかにみられ、敗たとはいえ、創造主である神はなお、自分自身の側にあり勝利の栄光に導いてくれるという信念があったと考えられる。)

カイパー著 中村妙子訳「聖書の女性」(旧約篇) 新教出版社, p.120—p.124, かつこ内は私見である。

- 1) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*, (Macmillan 1962) p.152
- 2) L. C. Knights, *An Approach to 'Hamlet,'* (London 1960) p.16
- 3) a) James Kirkup's *Tales from Shakespeare Antony And Cleopatra*. 富原芳彰編注 p.74  
b) 同書, p.68
- 4) a) シェイクスピアの言葉, 近代文学研究会, p.17 芳賀書店

「神の姿にも似た人間」が愚かになるのは欲がからんでくる時である。あらゆる欲望の中でも権力欲が最も規模が大きく、その被害の及ぶ範囲が広い。今日、世界は全体として混乱しており、各地に無秩序が広がっている。この時、われわれがシェイクスピアを読んで、そこにあらわれる同じような状況を見るならば、お互いに「愚かさの悲劇」は何とか避けたいという気になると思う。

上記のような文章が p.334 にありますが、この文章が何を言っているのか語らずともわかることであるが実生活にはなかなか生かされていない。「愚かさ」は避けられるものならさけたいではなく避ける努力をせねばならない。これは、また、「アントニイとクレオパトラ」にもいえることがある。

「シェイクスピアの言葉」はいろいろなところを参照引用させてもらい、ヒントになりました。

- b) 同書, p.9
- c) 同書, p.10
- d) 同書, p.20

5)

I will to Egypt:

And though I make this marriage for my peace,  
I' the east my pleasure lies.

(II. III. 38—40)

政略家であることを、「シーザーの近くにいるのはよくない」という予言者に明らかにする。

I think the policy of that purpose made  
more in the marriage then the love of the parties.  
(II. VI. 126—127)

Not he that himself is not so; which is  
Mark Antony. He will to his Egyptian dish again:  
(II. VI. 134—136)

第三者にも明らかなように、政略家として自分の足場を固めようとしていたが、しかし、アントニイには重大な局面が訪れた。クレオパトラの軍艦が全部、逃げ出してしまい、大敗に終わってしまう。だが、彼は偉大な人物となった。何故なら、黄金を部下に分配してしまい、シーザーのもとにいき、手を結ぶように進めた。また、責めてもよいはずのクレオパトラをそうするのでもなく「自分がすべて悪いのだという意味のことを……」を述べて、自分自身を責めるのである。苦悩と試練(重大な局面)が彼をして偉大な人間にしたのである。まさにソクラテスの述べた「私はおのれの無知を知っている」いわゆる、無知の自覚こそ、真の知恵の第一歩なのである。

Your emperor

Continues still a Jove

(IV. VI. 28—29)

「神々の王のようであり」「寛大な泉のような人で卑劣な行いにさえ黄金をくれた」と。兵士とイノバーバスとの会話のやりとりの意味がよく理解できる。まさに、我々誰れもが深く感動させられる場面である。政略家としての人生を歩みながらいろいろな試練をえて、寛大になり、偉大な人物となった。純粹にも、その恋に生きた彼が減びることは、悲劇美を達成したことにはかならない。クレオパトラの感情もアントニイ同様、浮気心から真実の恋へと高められ、彼の寛大、高貴がすすむにつれて、純化されていくのである。トレミー、ジュリアス・シーザー、ポンピー、アントニイと男を次々にかえていくクレオパトラを作ったシェイクスピアは、高い位置に上げ、美しく、澄んだものに完成したのである。それは基督教のイメージを用いながら異教的世界を鮮明にした悲劇美である。

6) テキストは、

The Kenkyusha Shakespeare, Antony And Cleopatra, Kenkyusha. The New Shakespeare, Antony And Cleopatra, Cambridge University Press. 引用文はすべて研究社版であり、ケンブリッジ版を参照する。

#### 参考文献

The Imperial Theme, G. Wilson Knight, Methuen & CO. LTD

シェイクスピア, アンリ・フリュシェール 笹山隆訳, 研究社

ヨーロッパの個人主義, 西尾幹二, 講談社現代新書

美と宗教の発見, 梅原猛, 講談社文庫

Six Tragedies of Shakespeare J. Dover Wilson, 森清・尾崎寄春編注 英宝社

生きるのが下手な人へ, 紀野一義, 光文社